

巻頭言

「教育と研究」と「教育研究」

理工学部長 山中明生

平成 23 年 3 月の創刊号刊行以来、千歳科学技術大学フォトニクス研究所紀要は本学の研究活動について情報発信を続けています。一方本学の教育活動については知る機会は殆どありませんでしたが、第 7 巻では第 2 号として「教育特集号」が刊行されることになりました。本号では共通教育、教職課程の教育、そしてプロジェクト教育について 4 つの報告が寄せられています。授業シラバスや授業公開では知ることができなかった授業の背景なども書かれており、興味深く読ませて頂きました。教育特集号を企画されたフォトニクス研究所長 川辺豊先生に感謝を申し上げるとともに、執筆の労を厭わなかった先生方に敬意を表します。

大学に勤務していると「教育研究」という言葉をよく見聞きします。分かっているようで分かっていない言葉なので、改めて検索してみると、「大学などで、学生と教員などの人員が所属して、教育と研究の 2 つの業務が、一体的に行われることをいう。したがって、『教育又は研究』という意味とは異なる」と記されていました。つまり大学では教育と研究を分けて考えてはいけないということなのでしょう。そこで思い出すのは、むかし高名な先生から伺った、「大学の研究には学生の研究と教員の研究がある。学生の研究は教員にとっては教育なのだ。つまり大学教員の多くの用務は教育なのだ」というお言葉です。そこで教員の研究についても一歩考えを進めてみますと、学会での発表や議論をとおして教員自らが教えられ、育てられているように思います。流行り言葉を使えば、「研究活動は教員自身のアクティブラーニング」と言えるでしょう。つまり大学の活動は「教育と研究」ではなくて「教育研究」なのだとなんて思いました。

さて教育と研究には大きな違いも見られます。たとえば研究活動では、学会発表や論文執筆により自らの「研究」を客観的に見るとともに、その成果を社会に発信しています。一方教育活動では、一部の教員を除いてそのような機会は殆ど有りませんでした。そのため今回の教育特集号の刊行には大きな意義があると思っております。フォトニクス研究所紀要が、本学の「研究活動の発信の場」から「教育研究活動の発信の場」へと大きく発展していくことを期待しております。